

【台詞集：アサシン】

■ [音声有り](#)

- [選択](#)
- [登場](#)
- [勝利](#)
- [攻撃](#)
 - [通常攻撃](#)
 - [必殺技](#)
 - [超必殺技](#)
 - [聖杯必殺技](#)
- [魔力開放](#)
- [軸移動](#)
- [受け身](#)
- [ダメージ](#)
- [K.O.](#)
- [勝利台詞](#)
- [勝利台詞・音声無し](#)
- [ストーリー](#)

音声有り

選択

- アサシンのサーヴァント 佐々木 小次郎
- ほう、私を呼ぶか？
- ふっ、待ちくたびれたぞ

登場

- 侍相手というのも風雅であろう？
- やれやれ、血生臭いことよ
- 一芸、披露仕る
- いざ、尋常に
- 我が剣の露と消えるか？
- では、果たしあおうぞ（VSセイバー）
- カゲロウの如き我が命だが、今消されるのは困る（VSキャスター）
- これはこれは...涼やかな風の如き御仁よ（VSゼロ・ランサー）

勝利

- いやいや、一太刀で介錯できぬとは申し訳ない（1本目）
- それで終わりではあるまいな（1本目）
- おや？ 思いのほか太い御仁よな（1本目）
- 刀身に歪み無し、全くの無傷とはな（決着時）
- 素晴らしい戦いであった（決着時）
- 気に入らぬ相手であれば生きては帰さん（決着時）
- これはこれは 無作法であったか
- 一念鬼神に通じる。人の身と侮ったな（決着時）
- 視えない剣がこれほど厄介とはな.....（VSセイバー）
- 門から出るのも悪くないな（VSキャスター）

攻撃

通常攻撃

- フッ！

へやっ！

-
- せいっ！
- せやっ！
- そうれ！
- どうした？
- 終わりだ！
- 轟！

必殺技

- 嵐三連：嵐三連！/受け切れるか？/そうれ
- 風車：掛かったかな/若いな
- 雀刺し：そこ/そうれ/覚悟
- 石花：石花！
- 春雷：春雷！
- 痺れ鯨：痺れ鯨！
- 鬼殺し：覚悟...!/掻っ捌く！
- 風流し：おやおや.../弱いな/よし、中りだ！

超必殺技

- 秘剣・燕返し：秘剣、燕返し
- 秘剣・燕返し(風流しキャンセル時)：遅い...何処を見てる！/見切った...為て遣ったり！

聖杯必殺技

- 秘剣・燕舞：終わりだ！/秘剣、燕返し

魔力開放

- 生憎だな！/参る！

軸移動

- いやいや
- 遅いな

受け身

- 見せ所よな

ダメージ

- ぐっ
- これは
- なんと
- なにい！？

K.O.

- くっ...不覚...
- あっけないものだ...

勝利台詞

- 他愛もない、もっとこの無聊を慰めてくれる者はないものか
- いかかかな？我が秘剣、今生の見納めに相応しいものであれば良いのだが
- 我が剣先からは燕でさえ逃れ得ぬ、翼もないそなたには酷な勝負であったな
- 不本意ながら、私の役割はこの門番だ、生きては通さんし、生きては帰さん
- ふむ...この程度の使い手なら、あえて見逃してあの女狐を驚かせるのも一興だったか、惜しい事をした

いや通（あっぱれ）なり、雅にして熾烈なる極上の剣だった。セイバーの異名は伊達ではなかったな。（VSセイバー）

-
- ほう？まさか我が秘剣と同じ境地に達したものがいようとは、長生きもしてみるものだ（VSアサシン）
- 思い知ったか女狐。まさか飼い犬に手を噛まれるとは思ってもよらなかったようだな（VSキャスター）
- 二槍使いとは珍しい、見れば風流を解する歌人のようでもある。
次があるのならば、月を肴に語らいたいものよ（VSゼロ・ランサー）

勝利台詞・音声無し

- 生き恥を晒すその屈辱、察するぞセイバー。女狐にしても、無粋が過ぎる。…さて、いよいよもってどうしたものか……（VSセイバー）

ストーリー

■ オープニング

アサシン「…見覚えのある石段だ。ここは……柳洞寺？
しかし、この空の澱みようはなんとしたことか」

キャスター「それは、ここが貴方の知るより遠い時の果てにある世界だということです、
佐々木小次郎」

ア「佐々木……小次郎？それは私のことか？」

キ「あら、それが貴方の名前ではないの？
貴方はこの時代、そう呼ばれていると記憶しているのだけれど」

ア「そもそも、女。そなたは何者だ？」

キ「私は貴方を召喚した、この世界での主、
そして貴方は聖杯戦争に呼ばれた私のサーヴァント。
既にある程度の知識は聖杯によって授けられているはずよ」

ア「成程。早い話が果し合いに招かれた…という事か」

キ「その通りよ、佐々木小次郎。
いえ、これからはアサシンと呼ぶべきね。
貴方は今後、この柳洞寺の山門を守る番人としてこの場を守り通しなさい」

ア「生憎だが断る。
剣を取る理由に拘る趣味はないが、
女の命令で戦うのは性に合わん」

キ「……アサシン
まさか貴方、自分に自由意志があると思って？」

ア「…ぐっ、そうか…令呪とやらの強制か。
知識としては知っていたが、これはなかなか厄介な代物のようだな…」

キ「フン、貴方は私の傀儡として呼ばれたのよ。
その減らず口も、今ここで閉じてしまった方がいいのかしら？」

ア「ふん…いいだろう女狐、ここは貴様に従うとしよう。
だが残りの令呪は2つ、聖杯戦争が終わるまで、
それで私を御しきれるかな…」

■ 4戦目 / セイバー

ア「そこまでにしておけセイバー。
その秘剣、盗み見ようとする輩がいる。」

セイバー「……何だと？」

ア「このまま続ければ我らだけの戦いにはなるまい、
生き残ったものにその恥知らずが襲い掛かるか、
それともお前の秘剣を盗み見るだけが目的なのか…
どちらにせよ、あまり気乗りのする話ではないな
生憎と、私の役目はこの門番でな、帰るといっているのであれば止める気は無い」

セ「待て、決着をつけないつもりかアサシン……！」

ア「あのままでおけば秘剣の全てを味わえたであろうが…よいところで邪魔が入った。
そなたにとっては僥倖であったか。

そら、迎えも来ている。そこにいる小僧はそなたのマスターであろう。
盗み見をする戯けが小僧に標的を変えぬ前に立ち去るがいい」

キ「待ちなさいアサシン。今、セイバーは手負いの筈
外野など気にせず続けるように」

セ「あれは……キャスターのサーヴァント！？」

ア「…女狐め、生憎だが口出しないでいただく。
私は無粋な決着など望まん」

キ「フン、まだわかっていないようね。
貴方が望むか望まないかは問題ではないのよ」

ア「……ぬッ……」

キ「ああ、気が変わったわ。そのセイバーのサーヴァントには興味があります
トドメまでは刺さず、生け捕りにするのよ」

セ「勝手な事をほざくな！
貴様がアサシンと徒党を組んでいるというのであれば、
両者ともここで切り伏せるまで！」

ア「やれやれ、令呪に縛られては是非も無い…
セイバーよ、そなたとは潔い決着を望んでいたのだがな」

■ 8 戦目 / バーサーカー

ア「いよいよ最後の相手か……
だが、この気迫は……」

バーサーカー「！！！！！」

ア「ぐふッ！」

キ「あ、アサシン！？そんな、たったの一撃だなんて……
駄目だわ、実力が違いすぎる…」

バ「！！！！！」

キ「立ちなさいアサシン！
前衛となって私を援護するのよ！」

ア「……」

キ「アサシン！…くッ、令呪にて命じます
立ち上がってバーサーカーを戦いなさい！
死ぬまで戦うのよ！」

ア「……承知した。
……だが、油断したな女狐」

キ「ぐ……はっ！？」

ア「令呪による強制、確かに受け取った。
フフ、おかげで小気味良い程に力が湧いてくる」

キ「アサシン、貴方、まだそんな余力が……」

ア「化かしあいでは自分より優れる者はないと驕っていたようだが、
生憎と、武士にも兵法というものがある。
このような策は戦場の常よ」

キ「……おのれ……アサシン……ッ…」

ア「…死んだか、これで私も消えるのみだが……
いや、最後にこれほどの兵と巡り合えた事は嬉しい」

バ「！！！！！」

ア「いずこの英霊かは存じ上げぬが、
さぞ名のある戦士とお見受けする。
私も我が秘剣の全てをかけて死合おうとしよう。いざ、参られよ！」

■ エンディング

ア「げに凄まじいもののふであった
かような猛者と手合わせ叶おうとは...
フフ、時の果てまで迷い込んできた甲斐もあったというもの
しかし、些か以上に疲れた...
まあ、当然よな
己が手でマスターを切り捨てたとあっては、
この身と現世を繋ぎ止めるよすがもない
聖杯戦争...夢か現か、
なかなか楽しい一時であった
それにしても.....ああ、
やはりこの石段から見上げる月は美しい」